三省堂　国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese

特集

授業びらきのアイデア

vol.26

ことばの学び

三省堂　国語教育
a new way of learning Japanese
vol. 26

CONTENTS

1　巻頭エッセイ　幼い子の言葉にはっとする　長野 ヒデ子

特集　授業びらきのアイデア

2　言語活動を楽しむことの実感と期待　吉川 芳則
4　楽しく学びながら，一年間の基礎を作る　白井 達夫
6　自己紹介で印象付け，期待を持たせる　高橋 俊三
8　春の喜びを感じさせる授業びらき —低学年における詩の学習を通じて—　平田 園
9　「あいうえお」をまるごと楽しむ国語入門
—ピカピカの一年生と「あいうえお」を柱に，楽しく勉強を始めるためのヒント—　野澤 文
10　美しい日本語との出会い　波戸 三幸
11　違いに学び，知るから始まる，学び合う教室へ　舟橋 秀晃

実践交流

12　小学国語　音読劇で読む力を育てる指導の工夫
—『お手紙』の実践を通して—　神林 美紀
14　小学国語　読みの力を高める授業作り
—「雪わたり」・ポップ作りの実践を通して—　小澤 珠里
16　中学国語　思わず続きが書きたくなる
—小説「小さな手袋」の学習指導—　宮久保 ひとみ
18　中学国語　表現の豊かさを味わわせるための韻文指導の一方途
—俳句の大意をとらえる授業—　萩尾 徹子
20　中学国語　百人一首大会を開こう
—授業・朝学習・事前準備・大会—　日髙 辰人

22　**見つけた！ こんな文学教材**　第２回　「夏を見上げて。」（あさのあつこ）を小集団で読む　寺田 守
24　**サブカルチャーと国語の授業**　第２回　テレビゲームを活用した創作の導入　町田 守弘
25　編集後記

表紙イラスト
寺井さおり（テラコリ）

巻頭エッセイ

幼い子の言葉にはっとする

長野　ヒデ子

ながの　ひでこ　1941年，愛媛県生まれ。絵本作家。「おかあさんがおかあさんになった日」で産経児童出版文化賞，「せとうちたいこさん」で日本絵本賞を受賞。絵本や紙芝居等の作品が多数ある。「すっすっはっはっ こ・きゅ・う」等，呼吸と声をテーマにした絵本は話題をよんでいる。

幼子の何げない言葉にハッとして、うれしくなることが良くある。

そばにいる幼い孫娘に弟が生まれ「私お姉ちゃんになったよ、赤ちゃんかわいい！」と大喜びしていたのに、赤ちゃんを抱っこして寝ているママを見て、「おばあちゃんに赤ちゃんあげる。赤ちゃんはいらない。おばあちゃんとねんねすればいい」という。「そうねえ、おばあちゃんが赤ちゃんもらって、一緒にねんねしてもいいけど、おばあちゃんはおっぱいが出ないから、おなかがすいたらかわいそうでしょう。」と言うと、

「おばあちゃん、ひっぱれば？　きっとおっぱい出るよ。がんばれば？」と真剣に私の顔を見つめるのだ。その言葉に私も孫娘のパパである私の息子も、「ひっぱればかー！」と大笑いして抱きしめた。けなげな孫娘、赤ちゃんにママをとられて必死で我慢していたのね。「ひっぱればー」はわすれられない言葉になった。やっぱりおかあさんが一番よね。

そうそう、そう言えば昔うちの娘が三～四歳のころ、こんなことがあった。美しい満月を見て、「お月さまきれいねえ～　♪でたでた月が～」とうたっていたら

「ねえ、おかあさん。アメリカにもお月さまあるの？」と真剣なまなざしで聞くのである。

「あるわよ。アメリカからも見えるのよ」と言うと安心した顔でまた尋ねた。

「イギリスにもあるの？」「イギリスにもあるよ」

「じゃあインドは？」「もちろんインドもよ」

「ふーん」と納得した。「見える」というのでなく「在る」のだということもなんだか嬉しく感心した。子どもはそう思うのだなあと気づかされた。当時、娘はアメリカとイギリスとインドしか国の名前を知らなかったのでそこで終ったのだが、世界中の国をもっと知っていたらこの質問がまだ続いたかもしれない。「お月さまを見て、そんなこと思うのだねー」とほんわかしていたら、

「ねえ、おかあさん。みーんな、ひとつずつお月さまがあってよかったねえ」とほっとした顔になってほほ笑んだ。「まあ！　なんていい事を言うのだろう！」と幼い子の言葉がいとおしくて、胸がいっぱいになってしまったことがあった。「そうよ、お月さまはひとつずつよね、人よりもっと欲しいと思うから争いが起こるのだよね、お月さまに笑われるなあ」と。幼い子どもの言葉にはっとすることがいっぱいある。

その娘ももう直ぐ母親になる。幼い子とまた向き合う時、此の事を思い出すだろうか。

特集

授業びらきのアイデア

年度の最初の授業は、児童生徒が一年間学習に取り組んでいく意欲や態度を形成する大切な時間となります。国語科の授業びらきにはどのような方法があるのか、さまざまなアイデアを紹介します。

言語活動を楽しむことの実感と期待

兵庫教育大学
吉川　芳則

はじめに

一口に年度初めの国語科の授業と言っても、いろんなケースがある。小学校一年生は、やはり特別である。持ち上がりの学級と新しい学級とでも意味合いが違う。中学校では、学級替えがあっても、教師が学年を持ち上がれば、同じ国語の先生の授業の継続ということにもなる。また、授業びらきという場合、まさしく最初の一時間を指すのか、第一教材（単元）を学習する間を指すのかによって捉え方が異なる。（本稿では最初の一時間を授業びらきの時間として捉えることにする。）

いずれにしても、教室が変わり、新しい教科書、買い換えたノートを机の上に置いてのスタートである。国語は苦手だ、好きではないという思いを引きずっている子も、新たな気持ちで授業に臨むことができる数少ない機会となる。

以下では、そうした思いに応える授業づくりの観点を言語活動の楽しさを実感すること、言語活動への期待を持つことに求めてみる。

声を出す、響かせる

楽しさを実感させる言語活動として、まず声を出すことに取り組みたい。自己紹介のスピーチで、ということも考えられるが、できるだけ多くの児童生徒に機会を保障するという点で音読がよい。投げ入れ教材を用いてもよいが、新品の教科書が目の前にある。冒頭に配置されていることが多い詩や文学教材を使うようにする。

書かれていることばのおもしろさ、豊かさは、声に乗せて表出してみて感じ入ることが多い。まずは一人で声に出して読んでみる。意味のわからないことばがあれば予想し合ってもよいが、さっと教えてやればよい。書かれていることばを声に出すこと、教室に読み声が響くこと、ことばの響きを自分たちの耳で確かめることを大事にしたい。

ペアで一文（一段落、一連）ずつ交互に音読すること、グループで順番に音読することも、新しい友達、旧知の仲間の一学年進級した声を感じる場として意味がある。

一斉音読も積極的に取り入れる。はじめは小さな声であったり、不揃いであったりするだろう。それでも教師もいっしょに読んでリードする。揃ってきたらほめる。集団によ

るボリュームある声の響き、心地よさは、学校でないと経験できない。今後の音読活動への期待がわく。

グループごとに、どこをどのように読むか相談させ、ミニ群読のようになってもおもしろい。仲間といっしょに協力して言語活動（音読）をする。声を響かせる。そのことの楽しさを感じ取らせたい。

短作文としての書くこと

書くことは苦手だ、面倒だと思っている児童生徒は少なくないだろう。そんな子どもたちに「これからの国語科授業では、気楽に、簡単に鉛筆を動かしながら、書くことのおもしろさ、よさに触れていくようにするよ」というメッセージを送るようにする。短作文としての書くことの導入である。

短作文というのは、一語、一文、二文、一段落、そして二〇〇字程度までと幅はあるが、量的に短い書くことを言う。学習者にとっては負担が軽く、長い作文を書くことの土台作りとしても機能する。

例えば、第一教材の詩や文学教材を読んで、読後の感想を書くとする。ここで長々と書かせたのでは「また今年もか…」ということになりかねない。そこで短作文の発想を借りて「読んだ感想を一語で書いてみよう」というふうにする。どうしてその一語にしたのか、理由を一文（一行）で書いて付け足しておく、ということになってもよいが、それは付録。あくまで「一語で」にとどめておく。

一語で書きにくい子には、二語になっても、一文で表すことになっても認めるようにする。気軽に書く、ちょっと書き留める。その感覚がいいことなのだと伝え、取り組みやすさに気づかせたい。

短作文とはならないかもしれないが、物語（詩）の中で心に残った（気に入った、好きな）ことばを一つ（二つ）選んで、ノートに書いておく。こうした形での感想を書くことも簡単にできて楽しい。いずれも読むことと書くことを関連させた言語活動である。

話して伝える

右に述べた短作文として書いたことは、隣の子に、グループの子にどんどん話して伝えるようにする。なぜそういうことを考えて書いたのか、理由を話すということになる。席を立ってもいいから、五人の友達に話してあげようという活動にすることもできる。

本来、思ったことや考えたことをおしゃべりするということは、楽しい活動である。国語科の授業にもどんどん取り入れて、多様な考え、発想が生まれる機会、場とすることが望まれる。まして最初の授業でもある。気楽に友達に話して伝える、相手の考えを聞いてあげる場を設定し、伝え合うことの楽しさを感じさせる時間にしたい。

読んだこと、考えたこと、書いたことは、互いに伝え合い、情報交換して、また自分の考えに生かしていく。そういうことを楽しみながら行う国語科授業になるという予告を、話して伝える言語活動を実際に経験させる中で行うようにする。

おわりに

スタートの授業ということで、特別プログラムを設定して児童生徒の興味をひくことも考えられてよい。

しかし本稿で述べたのは、国語科の授業では話す・聞く、書く、読む言語活動を楽しく、学級のみんなといっしょに行っていくことになるという今後の授業の基本方針を実感させ、期待を持たせる、オリエンテーションの性格を持った授業びらきである。

押しつけず、子どもたちに気づかせるというスタンスを大事にしたい。

きっかわ　よしのり　兵庫教育大学教授。国語教育探究の会事務局長。説明的文章領域を中心に、学習活動の構成と展開のあり方について研究している。

楽しく学びながら、一年間の基礎を作る

横浜国立大学
白井　達夫

「国語の授業初めは楽しい活動にしたい。」とは、誰しも思うことである。しかし、子どもたちの学習への期待が最もふくらんでいる四月、「楽しかった」で終わらせてはもったいない。今後一年間の学習につながっていくような活動を工夫したい。

話し合い方を学ばせる

工藤直子さんの詩集『のはらうた』（童話屋）は、野原の住人たちがしゃべったり歌ったりした言葉を書き留めたという体裁になっており、子どもたちはどの詩も大好きである。

四月初めの国語の学習において、私はよく、その「創作上の作者」を考えるという学習を行った。

まず、創作上の作者を明らかにしないままに、「のはらうた」の中の一編を私が読む。

はるがきた
ももいろの　すきとおる　みみに
きこえてくる　はるの　ひびき
おかのうえから　らん・らん
たんぽぽの　ふかふかのうた

そして、野原の住人の誰の言葉かを当てさせるのである。

子どもたちはたいてい、詩の中にでてくる言葉に目をつけて「タンポポだ」と言う。

そこで、どこの表現からわかったかも発表するよう伝えたのち、もう一度読んでみる。そのうちに、「ももいろの　すきとおる　みみ」といった表現に気づき、「うさぎ」という答えも出てくる。（『のはらうた』では、この詩の作者は「うさぎふたご」となっている）

ここで、「はい、正解です。この詩の作者はうさぎです。」と終わらせてしまったのでは、話し合いの力は育たない。前の児童の発言につなげて話すよう指示していくのである。

「私も〇〇さんと同じで、うさぎだと思います。うさぎの耳の内側はピンクをしているからです」

「ぼくもうさぎが歌っているかなと思いました。丘の上から、タンポポの綿毛が飛んできたことを『ふかふかのうた』と言ったのだと思います。」

こんな発言が出ると子どもたちからは、「オー」という歓声があがったりする。

この学習では、「創作上の作者」を当てることがねらいなのではない。友達の言葉を聞くこと、そして、それを手掛かりとして自分の考えを深めていくこと、さらには友達の意見と関連付けて自分の意見を発信していくこと、そういう学習の仕方を身に付けさせていくことがねらいである。

子どもたちの発言をつないでいくのは、低学年は教師でよいだろう。しかし、学年が進むにしたがって、子ども同士でつないでいけるようにしていきたい。

なお、「のはらうた」の中には「創作上の作者」が詩の中に記されているものもあるが、それらが教材として適さないのは言うまでもない。

書くことの楽しさを実感させる

作文が嫌いな理由を聞くと、「書くことがない」「書き方がわからない」「めんどうくさい」といった答えが返ってくることが多い。

学年初めから本格的に書く指導を行うと、そんな気持ちを助長しないとも限らない。

そこで、私は「春、見つけたよ」というミニ単元を作り、自分の見つけた春らしさを短文にまとめさせるという活動を行ってきた。方法は二つある。

一つは、教室に花のない桜の木を書いたもの（模造紙大）を掲示しておき、そばに、葉書の二分の一くらいの大きさに切ったピンクの色画用紙をたくさん置いておく。子どもたちは春を見つけたら、ピンクの色画用紙を桜の花びらの形に切り抜き、そこに自分の見つけた春を書き込み、模造紙の木に貼り付けていくのである。

貼られた花びらカードが増えるにつれ、幹と枝だけだった桜の木が満開になっていく。子どもたちの意欲は、自然と高まり、いろいろなところから春を探して、カードに書くようになっていく。

「校庭のすみに、黄色いタンポポが咲いていました。」

「学校へ来るとき、風が、やさしくなったよ。」

目の付け所の良いカードや、表現が工夫されているカードなどを教師が紹介することで、題材探しの目や表現方法の多様さなどを学ぶことができるであろう。

秋に、いちょうの木をつかって「秋、見つけたよ」という活動を行ったこともある。子どもたちは案外敏感に、季節の変化を感じ取っているものだと感心させられた。

もう一つの方法は、ワークシートを使い、個人ごとに見つけた春を、こちらも花びら型のカードに書いて収集するというものである。

用意するのは、片面が青く、片面が白い色画用紙である。（なければ青い色画用紙でもよい）

色画用紙を二つ折りして、その白い方の左側には春にまつわる詩を印刷しておく。

私は自作の詩（と呼べるほどのものではないが…）を用いた。

春の詩

真新しいノートを開けて
春の詩を書こうとしたら
真新しいノートの上に
ひらひらとさくらの花びら
ぼくは
そうっと　そっと
ノートを閉じた

右側のページは空白である。そこに、子どもたちは自分の見つけた春を、ピンクの花びら型のカードに書いて貼っていく。前日に春を探してくるよう課題を出しておいてもよいし、クラス全員で校庭などを散歩し、春をさがしてみるのも楽しいだろう。

本好きな子を育てる

四月だけでなく継続的に行っていくという意味では「授業びらき」というタイトルにそぐわないかもしれないが、低学年を担任した時には特に、毎朝読み聞かせを続けてきた。あまり難しく考えると長続きしないので、私は子どもたちに一つだけ約束し、それだけは守るようにしていた。それは、一年間、毎日続けるということである。学校に来れば先生の読み聞かせが聞ける、その期待に応えることだけは守り続けたいと考えた。

読み聞かせに使う本は図書室に行って選んでいたが、しばらく続けていると、「先生、この本読んで」と持ってくる子も出始めたので、なるべく期待に添うようにした。

教師の読み聞かせは低学年で行うことが多いようであるが、中学年以上で実施しても、子どもたちは案外喜ぶものである。

今、教え子たちに出会うと授業のことはほとんど覚えていないようだが、読み聞かせのことは覚えてくれているので驚く。

しらい　たつお　川崎市の公立小学校を退職後、現在は横浜国立大学の非常勤講師。主な著書に、『授業を豊かにする28の知恵』（三省堂）がある。

自己紹介で印象付け、期待を持たせる

前群馬大学教育学部教授
高橋　俊三

一　自己紹介は印象深く

先ずは、私の自己紹介から。

群馬大学に勤めておりました高橋です。どうぞ宜しく。

群馬大学は、当然、群馬県にあります。群馬県で人口の多い街、市といえば、高崎と前橋です。その高崎、前橋から一字ずつ貰って高橋と言っております。宜しくどうぞ。

この自己紹介で、群馬県の人は勿論、群馬を知っている人は、確実に我が名を記憶してくれる。それだけではない。私の人間性、人柄にも興味を抱いてくれる。

名前と勤務先地名とがそんなにうまく対応するとはうらやましいとか、そりゃあ駄洒落だよとか、思われるかも知れないが、聞き手の多くは、瞬間的に面白いと感じてくれる。それが大事である。「名前＋α」の効果である。

この自己紹介は、およそ二十秒。自己紹介は短く、しかも面白いと思わせよう。「＋α」の「面白い」は、興味付けにつながる。興味付けは、学習意欲の喚起につながる。

四月、授業開きの自己紹介で、面白そうな教師であるとの印象と、授業も工夫してくれるに違いないとの期待とを、焼き付けよう。

おどけろというのではない。言葉使用の面白さを、アピールするのだ。話すも書くも、また、聞くも読むも、国語の学習は、ここから出発する。

二　授業に期待を持たせる

私の姓の言い方を、国語授業の興味付けの話材に使うことがある。

「タカハシ」という姓は、繰り返しているうちに、「タカアシ」になってしまう。人によっては、私の短い足にチラッと目をやりつつ、「タカアシさん」などと言う。

時間があるときには、黒板にローマ字で「TAKAHASHI」と板書し、日本語の語中・語尾のH音（ハ行音）は落ちてしまうことが多くありますと言いつつ、その中の「HA」の子音「H」を消して、やおら子どもたちのほうを向き、「皆さんは、ハ行をきちんと言ってくださいね」と結ぶ。

大人対象の講演では、「何歳になっても、Hの要素が落ちてしまうのは、悲しいことです」と言うこともある。しかし、このことは、子どもには絶対に言わない。言ったとしたら、中学生からは嫌われるし、小学生からは理解されないだけだ。話の価値は、聞き手によって決められるのだ。

さて、子どもの場合。ハ行のH音が消えたり、ワ行に転化したりする現象について、ちょっと話す。ほんのちょっとだ。

「岩（イハ→イワ）」「貝（カヒ→カイ）」の例や、動詞「会ふ（アフ→アウ）」「買ふ（カフ→カウ）」の例を示しつつ話してやると、学年によっては、相当な興味を示してくる。ただしこれは、音韻論の入り口をほんの少し覗かせただけで、後は抑えておくがよい。

国語の教師としては、更に説明をしたいところだろうが、詳細な説明は興味を失わせる。知ったかぶりをするなと、反感を抱かせる。

自己紹介では、さらりとやっておくに限る。

もっと知りたいなと思わせておいて、後日授業の時に、きちんと話してやることにしよう。それが、期待を持たせる自己紹介である。

三　趣味や好きなものを感じさせる

子ども向けの「落ち」ではないのだが、私としては、結構面白いと思う自己紹介ネタなものだから、例として使わせていただく。

今度は、「高橋」の漢字に纏わる話だ。

「高」という漢字には、「亠（なべぶた）」の下が「口（くち）」の高と、下が「日（はしご）」の高との、二種類がある。私の戸籍は「日」なのだが、私が長年、文字ではなくて口の言葉の教育、つまり音声言語教育に携わってきたものだから、公的には、少なくとも日中は、「口」のほうの高を使っている。

と、言った後に続ける話として、二種類の駄洒落を用意してある。

その一。数えてみると、「高」のほうに「口」が二つある。「橋」にも二つ。合せると、「口」が四つもある。口数が多い、なんちゃって。と、言うのが一つ。

その二。ところが、夕方になると、どういうものか、私は、「はしご」が好きになる。と、言うのが、もう一つ。

講演で後者を言うときは、ここで聴衆の笑いを期待するのだが、最近は笑うのはある程度の年齢を過ぎた、しかも男性諸氏であって、女性や若い人たちはしらけているということがある。「はしご酒」であることが通じないのだ。今は、「はしご」は、あまり流行らないらしい。時代は変わったものである。これではまして、子どもには伝わりっこない。

子どもには、他の話題を考えなくてはならない。ただ、「私は酒が好きです」と言っただけでは、面白くも何ともない。

四　あだ名や隠れた面を言って、興味付ける

自己紹介で面白がられるのは、あだ名や隠れたエピソードの紹介だ。

私は、別名「怪盗レンジ」と名乗っている。江戸家小猫さん（現在は猫八さん）の命名によるあだ名である。

十年ほど前まで、ＮＨＫ総合テレビに、『お母さんの勉強室』という番組があった。三十年以上前になるが、その中で「朗読で楽しむ」というシリーズが組まれ、私は指導者役で出演した。小猫さんは司会役であった。

初対面で名刺交換。当時、私の住所は世田谷区、勤め先は前橋市。「どのように通（かよ）っているのですか」と質問された。「週の前半は単身赴任ですよ。妻の作ってくれた冷凍食品を車に積んで持っていき、電子レンジで解凍して食べているのです」と答えた。翌日の休憩時間、「先生、いいあだ名を考えた」と言う。聞いてみると、「先生は、解凍レンジ。怪盗ルパンまでは行かないのです」と。

これはしめたと頂いたのが、このあだ名。芸人さんは、面白いことを考えるものだ。

実はテレビに出たことを自慢したい面も何割かはあるのだが、エピソードに含ませて紹介することによって、幾分、和らげられる。

五　自己紹介は工夫して

ところで、一～四の内容を、箇条的に、「名前は高橋です。言い方はタカハシです。漢字の書き方は、……」と言ったらどうだろう。これでは小学校低学年生のスピーチである。教師は話し方のプロ。名前を言いつつ、他の要素を匂わせる。感じ取らせる。余韻が大切だ。

もう一つ付け加え。新学期は転入生がいることも多いだろう。自己紹介と同じく、他者紹介にも気を配るのが、プロたる教師である。

たかはし　しゅんぞう　前群馬大学教授、ILEC言語教育文化研究所常務理事、話力総合研究所特別講師、日本朗読文化協会顧問。現在、話すこと・語ること・語り合うこと、読むこと・読み合うこと（朗読・群読）の実演と指導とに取り組んでいる。

春の喜びを感じさせる授業びらき
―低学年における詩の学習を通じて―

千葉大学教育学部附属小学校
平田　園

はじめに

四月はどの児童も期待と不安を胸に、緊張しているものである。だからこそ春の明るさ・あたたかさに気持ちを乗せて友達と一緒に声を出し、春を感じられる活動をすることで楽しくスタートさせたい。

一　教科書を開くとき

国語の教科書との初めての出合い。これから学ぶワクワク感を大切にしたい。そのため教科書を開くときのにおいを感じさせるようにしている。これは、四月の初めにしか感じられない教科書の印刷のにおいである。みんなで心を合わせて開き、ゆっくりと大きく息を吸って春を感じるのである。

その後、丁寧に折り目をつけさせながら、目次のページを開く。「この話が読みたい。楽しそう！」と会話をしながら、一年間どんな話と出合うのかを確認する。漢字のページも確認し、「たくさんの漢字が書けるようになる」ということを楽しみにさせる。

二　国語のノート一ページ目は、春のページ

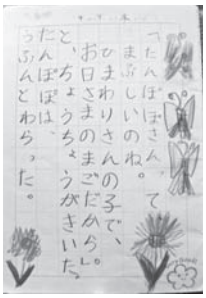
毎回開くノートだからこそ一ページ目は明るく楽しいページであってほしい。私はいつも「春の詩」を扱うことにしている。『たんぽぽ』（まど・みちお）の詩を使い、春のページをつくった。

①**春のイメージを発表させる。**「明るい」「あたたかい」「うれしくなる」というように全員に発表させる。発表したらみんなで拍手をおくる。声に出して発表することは楽しい、友達に聞いてもらえることは嬉しいという経験をさせる。

②**イメージをもとに詩の音読をさせる。**友達と顔を見合わせながら笑顔で音読したり、窓の外の春空を見ながら音読したり、詩の内容に合う動きを入れて音読したりさせる。

③**ノートに視写させる。**教師が黒板に少しずつ句読点の位置等を確認しながら書き、視写させる。書き終わったら詩から想像する絵を書かせる。

④**まとめの音読をさせる。**書き終えた児童から黒板の前にノートを開いて飾っていく。全員が書き終えた後、みんなでノートを眺めながら音読をさせる。



おわりに

この活動を行うことで、春の喜びを感じさせることができた。授業後、ノートを教室の後ろに飾ると教室が一気に明るくなった。そして国語の時間にノートを開けるたびに明るくあたたかい春の詩のページが見られるのである。

「春の詩」は、春の喜びを感じさせる恰好の教材である。

ひらた　その　現在は千葉大学大学院で佐藤宗子教授のもと、児童文学や、読書教育について研究をしている。

「あいうえお」をまるごと楽しむ国語入門

―ピカピカの一年生と「あいうえお」を柱に、楽しく勉強を始めるためのヒント―

東京都昭島市立共成小学校
野澤　文

一　元気な声で「あいうえお」

授業開始のあいさつの後「おなかに手をあて」とお腹に手を当てて子供たちに呼びかける。子供たちはすぐに応じる。そのまま「『あいうえお』と言ってみましょう」と誘う。まだ、書けない子がいたとしても、「あいうえお」は知っている。元気いっぱい「あいうえお！」と声を出す。すかさず「むねにてをあて」胸に手を当てて呼びかける。「あいうえお」と続けると、子供たちはついてくる。その後も、かけ合いで、リズムよく楽しくこの詩（あらい　たけこ作「あいうえお」）を読んでいく。読むといっても、口伝えで唱え、「あいうえお」を楽しむのだ。最後の三行「「あいうえお」は／母音といって、／日本の　ことばの　かあさんです」は教師が読む。これを、国語の時間の最初にくり返すと、一週間後には教師の部分も唱え出す子供が出てくる。驚きを交えてほめると、いつの間にか子供たちは終わりの三行まで暗唱してしまう。「母音」の意味を簡単に説明して丁寧に言うように伝えると、また張り切る。

基本の形をみんなが暗唱した頃から、違う体の部位を加えたり、教科書の「くちのたいそう」を入れたりして楽しむ。また、元気で伸びやかな声をほめて、「その声で今日勉強する○○を読みましょう。」と声をかけるだけで、子供たちの学習の構えができる。

二　空に　背中に「あいうえお」

一年生は文字を書く学習にも意欲満々、既にずいぶん書き慣れている子供もいる。正しい筆順や十字リーダーを意識した字形、とめ・はね・はらいに着目させたいが、「知ってる！」という気持ちから自己流を抜け出せない子供も多い。そんなとき、文字書き歌付きで書くとうまくいくことがある。現在品切れになっている『ひらがなあそびの授業』（伊東信夫著　太郎次郎社）にたくさんのヒントがあるが、たとえば「そ」を書くのにソーラン節で「ヤーレン」と右上に「ソーラン」と左下に「ソーラン」と右横に「ソーランソーランソーラン」とゆっくりふくらませてしっかり止める。そしてみんなで「ハイハイ」とできた字を見る。などのように進めるのである。歌は子供たちと作ってもよい。その歌に合わせて、空のノートに、練習帳に、書いていく。「お家の人の背中に書く」などと宿題を出すと「歌いながら書いてくれました」と連絡帳が届くこともある。

三　連載読み聞かせ「あいうえお」

文字を書く学習の後、私は、ごほうびのようにその日に習った文字のお話を読み聞かせる。『あいうえおばけだぞ』（五味太郎著　絵本館）、『あいうえおばけです』（東君平著　フレーベル館）他、いろいろな本があるが一冊決めておくと、平仮名の学習がすべて終わったときに一冊読み終わることになる。毎時間少しずつ連載風に読み進めることで、お話を予想したり、作ったりして楽しむ姿も生まれてくる。

のざわ　あや　昭島市立共成小学校主任教諭。

美しい日本語との出会い

鹿児島県鹿児島市立西紫原中学校
波戸　三幸

新しい学期が始まり、生徒たちは新鮮な気持ちで授業に取り組もうとしている。そんな新学期の授業びらきは一年間の学習の見通しをもたせるための大切な時間である。学習の進め方や自己紹介、ノートの取り方など取り組みたいことはたくさんあるが、この時間で一番伝えたいことは、これから学んでいく言葉のおもしろさである。日本語の奥深さを感じさせ、「国語の学習はおもしろい」「もっと勉強してみたい」という思いを抱かせたい。

授業びらきの時間に行っている漢字クイズを紹介したい。

月の呼び名として弥生や皐月などの異名があることはよく知られている。しかし、その他にも多彩で美しい表現が日本語には存在する。一月から十二月までのそれぞれの異名は多いものでは、なんと五十以上もある。月の名前という親しみやすい題材であり、しかもその美しい呼び名にはそれぞれに意味がある。その異名を漢字クイズとして出題している。

まず、個人でそれぞれが何月を意味する言葉であるかということと、その理由を考える。次に、グループでの初めての活動として話し合いを行う。例えば、「愛逢月」は「めであいづき」と言い、牽牛と織姫が出会う七月を指す言葉である。愛し合う者同士が出会うと言われる七夕にちなんだ美しい言葉である。生徒たちは、「バレンタインデーがあるので二月ではないか」という意見や「新しい人との出会いがある四月ではないか」という意見を述べながら、自分自身の考えをめぐらせ、言葉に対する見方を深めていくことになる。なお、「風待月」は涼しい風が吹いてほしいと感じる六月を、「夢見月」は夢見草とも呼ばれる桜が咲く三月を表す。

生徒たちはこれらの活動を通して、自分たちが学ぶ言葉のおもしろさに気づいていく。日本語の美しさを実感し、この一年間でより多くの言葉と出会いたいという意欲を抱かせる授業びらきにしたい。

漢字クイズ

それぞれ何月を指すことばでしょうか。
その理由も考えましょう。

理由

・愛逢月（めであいづき）（　　）月（　　）
・風待月（かぜまちづき）（　　）月（　　）
・夢見月（ゆめみづき）（　　）月（　　）

はと　みゆき　鹿児島市立西紫原中学校教諭。「生徒自身の言葉の世界を広げていく指導」について研究を続けている。

違いに学び、知るから始まる、学び合う教室へ

滋賀大学教育学部附属中学校
舟橋　秀晃

一　「優劣のかなた」を心がける

本誌25号の巻頭エッセイ「虚心坦懐に聞く耳を」（三宮麻由子、p1）には、はっとさせられた。未読の方のために冒頭のみ記すと、「ある中学校で特別授業をした後、生徒の感想が送られてきた。ところが、そのほぼ全部が『感想』ではなく『評価』の文章だったので愕然とした」そうである。本校でもその傾向があり、決して他人事とはいえない。

どうすれば虚心坦懐に聞く耳が育つだろうか。それにはやはり、大村はまの言うように「学びひたり／教えひたろう／優劣のかなたで。」（自作詩「優劣のかなたに」）を心がけるしかない。誰、あるいはどこが優れているとか劣っているなどということを気にする暇などなく必死に学習に取り組む雰囲気こそ、四〇人もの生徒が同時に学ぶ日本の教室で、四〇人の力を最大限引き出すのに、何よりもまず大事なことではないか。

二　「違いに学び知るから始まる」とは

国語の教室は特に、安心して自分の声を出し、その声を互いに受け止め合える空間にしたい。そうでなければ生徒は優劣を気にし、牽制し合い、互いに同調を強いて、言葉を発しなくなってしまう。私は近年、大村の言葉を自分なりに咀嚼して、授業開きから年中ことあるごとに「互いの〝違い〟に学べ」「〝知る〟ことは学習のまだ入口だ」と生徒に言い聞かせている。

三　班交流に注文、笑いに切り返す

とはいえ、言うだけでは浸透しない。そこで、四月のできるだけ早い段階から四人程度の学習班での意見交流を仕組む。牽制や同調から、生徒は決まって、互いの共通点をまとめれば話し合いをやめる。そこで「自分だけの発見や、他の誰かさんだけの発見、また互いの相違点も見つけ、その差の由来をこそ話し合え」と注文をつけ、話し合いを促す。

また、授業ではともすると、級友の失敗が笑いの種にされがちである。その教室で起きるそんな笑いの初回を絶対に見逃さず、「できないことに挑むのが学校、失敗は笑うな！それより、面白かったのは日本語のどの点？」と間を置かず切り返し、関心の対象を友の失敗から日本語のありようへ振り向け、かつ自分の無知を自覚させるようにもしている。

この指導をその後も浸透するまで繰り返すことで、指導者の本気度が生徒に伝わる。

四　交流があり笑いのある活動例

以上から、優劣が気にならず、生徒間の交流が促され、明るい笑いの起きる活動が特に春には好ましい。例えばこんな活動がよい。

・広告のキャッチフレーズを分類→型をまねたフレーズを自作し自分の名刺に入れる
・校庭を散策し春の一品をごく簡単な水彩画に→ショウアンドテル式で絵手紙スピーチ

楽しい活動をぜひ工夫したいものである。

ふなはし　ひであき　日本国語教育学会理事。全国大学国語教育学会会員。国立教育政策研究所「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者。

音読劇で読む力を育てる指導の工夫
―『お手紙』の実践を通して―

群馬県邑楽郡千代田町立東小学校　神林　美紀

一　はじめに

低学年の子どもは、音読が大好きである。ひらがなやカタカナが読めるようになったことを喜び、文字を読むことそのものを楽しむ。クラスの友達と一緒に、または一人でも、大きな声で一生懸命音読に取り組める。

この子どもたちが大好きな音読を、物語を読む学習に取り入れたいと考えた。文章をすらすら読み進めるための音読ではなく、物語を読み深めるための思考を伴う音読である。

しかし低学年の子どもたちにとって、音声言語だけで登場人物の心情を表現するのは難しい。そこで、抵抗感なく楽しんで学習に取り組める言語活動として、声と簡単な身体の動きとを付け加える音読劇を取り入れた単元を構想した。

二　音読劇を取り入れる利点

・音読が大好きな子どもたちの学習意欲を高めることができる。

・内容の理解が深まる。自分の声を自分で聞きながら、文章の意味を確認できる。文字言語を音声化することにより、言葉を具体的にイメージしやすくなるので、豊かに想像を広げながら、場面の移り変わりや、登場人物の行動や言動を読み深めていくことができる。

・他者との交流ができる。読み手の解釈によって異なる表現になるため、音読劇を聞き合いながら、「自分は～と考えたので、このように読んだ」「自分なら～と考えるので、このように読む」と考えを伝え合う場を設定できる。

三　単元の構想

（一）単元名　登場人物になりきって、音読劇をしよう

（二）教材名『お手紙』アーノルド＝ローベル作（『小学生のこくご　二年』三省堂）

（三）目標

・登場人物の行動や言動から、心情の変化を想像して読む。（読むこと）

・語や文としてのまとまりや内容、響き、登場人物の心情の変化などについて考えながら、工夫して音読劇を行う。（読むこと）

（四）単元計画（全九時間）

第〇次（事前学習　読書の時間）
アーノルド＝ローベルの作品を読もう。

第一次（二時間）
学習課題を設定しよう。

第二次（四時間）
音読劇をするために『お手紙』を読もう。

第三次（三時間）
音読劇発表会をしよう。

四　授業の実際

第〇次

国語の時間ではなく、朝の読書の時間を使って、アーノルド＝ローベルの作品を担任が読み聞かせたり、子どもたち自身で読んだ

りする時間を設けた。他の作品を読むことによって、がまくんとかえるくんの関係性について、多くの情報を得ることができると考えた。

第一次

『お手紙』を読んで感想を出し合った。「がまくんがお手紙をもらえてよかった。」「かえるくんはとてもいい友達だと思う。」とがまくんとかえるくんの行動や心情を思いやる感想が殆どであった。この感想を取り上げ、二人の心情を読み取って、「がまくんとかえるくんになりきって、音読劇をしよう」という学習課題を設定した。（一、二時間目）

第二次

第三次の音読劇発表会に向けて、次のような学習をした。

物語の大体の内容が把握できるように、挿絵だけを子どもたちに与え、物語の順番に並べ替えをさせた（三時間目）。低学年の文学的な文章の読み取りには、挿絵も重要な情報の一つになるからである。

次に音読劇の背景を作るために、場面分けをした（四時間目）。時間や場所の移り変わりで場面が変わることを教え、四つの場面に分けられることを確認した。

さらに挿絵を詳細に見比べさせると（五・六時間目）、文章の前半と後半に、玄関前でお手紙を待つがまくんとかえるくんの挿絵が二枚あることが分かった。構図と描かれている二人は同じであるが、その表情が違うことが読み取れた。そこで、二人の表情の根拠となる叙述を文中から探すよう指示すると、「一の場面は、かなしい時・ふしあわせな気もちだと書かれている。」「四の場面は、とてもしあわせな気もちで、そこにすわっていましたと書かれている」という意見が出された。

登場人物になりきって音読劇をするためには、「ふしあわせ」から「しあわせ」へと心情が変化する場面の読み方が大切である。その変化を捉えさせるために、三時間目に並べ替えた挿絵を見せながら、「かえるくんが来てもずっとベッドに寝ていたがまくんが、いつの間にかかえるくんと一緒に窓の所に立って話をしている。がまくんはいつベッドから出たのかな。」と、問いかけた。すぐに答えを出させるのではなく、動作化しながら音読する時間を設定し、考えさせた。子どもたちから出た意見は次の二つである。

・「きみが。」と言ったとき。

・驚いて「きみが。」と起き上がって、「ああ。」のところでベッドからでてがまくんのところに近寄っていった。

「では、がまくんの気持ちを変えたのはどの言葉なの。」と問いかけると、全員一致で、かえるくんの「だって、ぼくがきみにお手紙だしたんだもの。」という言葉であるとの意見だった。

そこで、三人ずつのグループを作り、がまくん役・かえるくん役・地の文を読む役となって、三の場面の音読劇を練習した。どのように読めばがまくんの心情が聞き手に伝わるのか考えさせ、声の大小（大きくする場合は三重線小さい場合は一本で）や声の速さ（ゆっくりの場合は波線）や簡単な身振りを台本（教材文を拡大したもの）に書きこませた。

第三次

練習をして（七・八時間目）、音読劇発表会を行った（九時間目）。クラスで複数のグループができたので、お互いの音読劇を真剣に聞き合うことができた。

五　おわりに

「登場人物になりきって、音読劇をしよう」を最終目標にして、学習を進めてきた。単元を構想する中で、特に意識したのは、第二次の学習を音読劇というゴールに向かって充実させることだった。

今後も子どもたちの読む力を育てる授業づくりを心がけていきたい。

かんばやし　みき　千代田町立東小学校教諭。

実践交流
小学国語

読みの力を高める授業作り
―「雪わたり」・ポップ作りの実践を通して―

東京都江戸川区立西一之江小学校　小澤　珠里

一　はじめに

高学年の読むことの目標は、「目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身につけさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」と学習指導要領に示されている。そこで、本単元で児童に身につけさせたい読みの力を四つに絞り、実践に取り組んだ。

【児童に身につけさせたい読みの力】

①登場人物の相互関係、心情の変化を読む力
②場面を比べて、物語全体を読む力
③優れた叙述を味わいながら読む力
④文章を読んで考えたことを伝え合い、自分の考えを広げたり深めたりする力

また、宮沢賢治の作品は児童にとって難解で、物語の世界に入り込めない児童もいる。そこで、読みの力を明確にして取り組むことで、児童に読みの力が高まるだろうと考えた。

二　単元について

（一）単元名

「おすすめ本を紹介しよう」
～ポップを作って本のよさを伝えよう～

（二）単元計画（全八時間）

①宮沢賢治の作品にふれる。
②「雪わたり」を読む。
・情景描写や優れた表現を読む。
・登場人物の行動会話から読む
・場面の変化から読む。
・作者から読む。
③「雪わたり」のポップを作る。
・雪わたりで読み取ったことをポップに表現する。
④自分のおすすめ本のポップを作る。
・日常の読書生活を見つめ直し、「雪わたり」の学習を生かしてポップを作る。

本単元は、物語文「雪わたり」と「読書すいせん会をひらこう」から構成されている。

児童の読書の幅を広げるためにも、「雪わたり」で読み取ったことを手がかりにして、自分のおすすめ本が紹介できるように、単元の最後にポップ作りの活動を取り入れた。

三　「雪わたり」を読む

（一）読みの手がかりを明確にする。

【読みの手引き】

①初発の感想
②文章表現
・色彩表現
・比喩
・繰り返し
・擬音や擬態
③行動や会話
・吹き出し
・サイドライン
④場面の変化
⑤作者について
・ほかの作品等

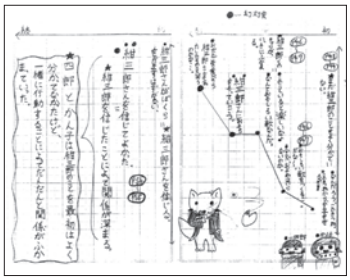
物語を、ずばり一文で表せるように

（二）優れた情景描写のランキング作り

「雪わたり」の特徴であるリズムある表現や擬音、情景描写をランキングにして、伝え合い、音読する。

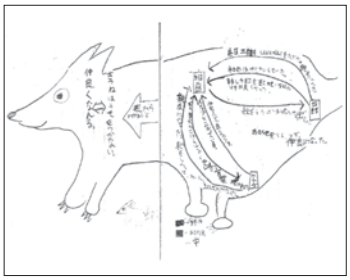
（三）人物の関係の変化を場面を比べながら読む。

【心情曲線】



登場人物の気持ちの変化や関係の変化を折れ線グラフに表し、根拠となる文章や読み取った気持ちの変化を書き込む。

【人物関係図】



登場人物同士の関係を矢印で表す。登場人物同士の距離を表しやすい。

矢印は、根拠となる文章表現や読み取ったことを書く。

（四）一文で表す。

クライマックスの場面から、「雪わたり」のおもしろさや登場人物が伝えたいことを読み取り、短い言葉で表す。

（児童の作品例）

・違う生き物でも同じ気持ち　同じ気持ちで絆が生まれた。

・きつねのうその犯人は人間

・大人になっても、うそや人を悪いと言わないこと

・三人の心をつなげるきびだんご　など

四　ポップ作り

ポップを作るためには、内容の本質を読み取り、短い言葉で作品のテーマを表現する必要がある。そのために、「雪わたり」で学習したことを生かして、最初に「雪わたり」のポップ作りを行った。

【ポップを作るために】

①作品のテーマを一文で大きく書く。

②おすすめの叙述を入れて書く。

③読み取った内容を書く。

・どんな話か。

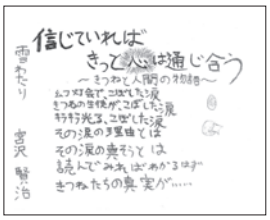
・クライマックスの場面

・テーマの説明　など

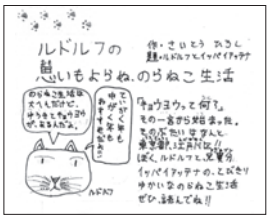
④絵や吹き出しを工夫して書く。

さらに、自分のおすすめ本のポップを作ることで自分の読書を見つめ直すことができた。ポップは図書室や、学級文庫に掲示することで、児童の読書に対する意欲を高めることができた。

●雪わたりのポップ



●おすすめ本ポップ



五　おわりに

今回の学習では、「雪わたり」の初発の感想に「全く分からない話」と書いていた児童が、終わりの感想で登場人物の関係の変化や登場人物が伝えたいことを読み取り、ポップにまとめることができた。

しかし、全体を読んで関係の変化を考えられる児童が増えたが、場面ごとの細かい読み取りに課題が残った。限られた時間の中でより効果的に読みの力が高まるように、授業展開や手法をこれからも工夫していきたい。

おざわ　じゅり　江戸川区立西一之江小学校主任教諭。

思わず続きが書きたくなる
―小説「小さな手袋」の学習指導―

奈良県山辺郡山添村立山添中学校　宮久保　ひとみ

はじめに

小説を集団で学ぶ醍醐味、それは互いの経験値や価値観を交流し合い、考えを深める楽しさにあるのではないか。日頃はライトノベルズを好む生徒が多いが、共に小説を学ぶ意義を体感させる取組として、今回は二学年「小さな手袋」の学習活動を紹介したい。

一　小説の系統的指導を意識する

平成二四年度版三省堂「中学生の国語」一年～三年では、小説は後の太枠内のように配されている。囲みを付けた三作品は、比喩表現が巧みで、登場人物の描写もしっかりしている。また、この後どうなるのだろうという結末が生徒の興味を引き、読後に余韻を残す。

生徒の初発の感想も、人物の言動や心情について、また、なぞを残した結末について多様なものが見られ、それらを基にして学習計画を立てると、生徒の関心や意欲を高め、効果的である。指導の際、次の三点を意識した。

主　主となる学習課題
副　学習課題を解決するための補助課題
結　余韻を残した結びについての課題

これらを三作品に当てはめてみる。（＊は新出作品。○は既出作品。）

［一学年］
○別役実「空中ブランコの乗りのキキ」
主「なぜキキは命を懸けてまで四回宙返りをしたのか。
副「第四の意味段落をさらに二つに分けるとすると、どこが適当か。」
結「白い大きな鳥は、キキなのか。」
＊重松清「タオル」
○芥川龍之介「トロッコ」
［二学年］
○太宰治「走れメロス」
○内海隆一郎「小さな手袋」
※主　副　結　は後述する。
＊小澤征良「蒼いみち」
［三学年］
○トーベ・ヤンソン「猫」
主「結局、だれの心が変わったのか。」（猫は変わらず、主人公の心が成長。）
副「野性的な猫、マッペと素直な飼い猫スヴァンテを比べよう。」
結「この後、話はどう展開するのか。」
＊森鷗外「高瀬舟」

二　作品について

この小説は、祖父の死を体験し、それまで交流していた老女との交際を絶ってしまう小学生の娘シホを、終始優しく見守る父の視線から書いたものである。小学校三年生で老女と出会い、六年生で思い出すが、老女は認知症になっていた。その出来事を父が改めて、

六年前の追憶として語る。

ということは、シホは小説の中では中学三年生。生徒は自分の小学生時代から現在、そして、未来にまで思いをはせながら読むことができる作品なのである。

三　指導の実際（全五時間）

＊新出漢字や語句の確認は予習扱い。

第一次　（一時間）

1

・全文を通読し、ストーリーの展開に合わせた小見出しを各自考え、グループで意見を出し合い、最善の小見出しを決める。

・登場人物に対する疑問を、「なぜ～は～したのか。」という形で書き出す。

第二次　（三時間）

2　前時の疑問を基に、主・副・結の課題を確認する。

主「なぜシホは祖父の死後、宮下さんに会いに行かなくなったのか。」

副「夫婦がシホに真相を聞けなかったのはなぜか。」

結「この話の続きを書いてみよう。」

3　シホの心情の変化と父の思いを読む。

4　病院で話を聞いたシホの心情と父の思いを考える。

第三次　（一時間）

5　話の続きを考えて書き、交流する。

［条件］

・父親の語りとして書くこと。

・設定は、雑木林に入った直後でも、ずっと先のことでもよい。

◆病院を辞去し、再び雑木林に行ったシホは涙を流した。ミトンの手袋を顔に強く押しつけ、声を上げずに静かに泣いていた。宮下さんへの感謝、後悔、自責の念が交差し、流れた涙なのだろう。遠目からシホを見ていると、シホは一本の木に駆け寄っていった。その木にそっとふれたシホの口が「ありがとう」と動いた気がした。きっとあの木が、シホと宮下さんが時間を共有した木なのだろう。

「シホ、行くぞ。」

私が声を掛けると、シホは満面の笑みで

「うん。」

とうなずいた。祖父が亡くなってからしばらく影を潜めていた娘の笑顔を見たのは久しぶりだった。小三のころ、宮下さんのことを無邪気な笑顔で話してくれたあのころのシホの姿が脳裏をよぎった。目の前にあの頃と同じ笑顔があることに、今度は私が涙してしまいそうになった。（後略）　（生徒作品1）

◆あれから五年。シホと私は大連に来ている。それもつい先週、入院していた宮下さんが亡くなったことがきっかけである。シホはあのプレゼントをもらった日から毎日のように、宮下さんのもとへ通っていた。しかも、シホといっしょに話をしているうちに、認知症が回復傾向にあった矢先のことだけに、祖父のときと同様に、いやそれ以上の悲しみを見ていて感じた。私はまた、ショックでシホに何らかの変化が起きることを心配したが、数日後、彼女は「大連に行ってみたい。」と言い出した。ちょうど夏休みでもあった。

今見ている大連の景色は、宮下さんの知っているものとは違う。しかし、シホには、おばあさんが見ていた当時の大連が見えているようでしかたなかった。　（生徒作品2）

おわりに

五時間め。黙々と書き始める生徒たち。全員がシホの気持ちを想像し、彼女を見守る父の立場で書くことができた。作者の文体さながらに。作者の筆力のなせる技か。優れた作品は、生徒の想像力を育てる。作者の他の本や森絵都、重松清ら、ストーリー運びの巧みな小説家の本を朝のブックトークで紹介したところ、生徒の読書熱を上げることができた。

みやくぼ　ひとみ　平成一五、一六年度に「国語力向上推進モデル校」指定を受けて以来、「全校態勢で育てる言葉の力」を研究テーマとしている。

表現の豊かさを味わわせるための韻文指導の一方途
―俳句の大意をとらえる授業―

福岡県春日市立春日西中学校　萩尾　徹子

一　はじめに

社会が多様に変化をしている中、必要なときに、必要な場で、目的にかなった文章を、適切に書く能力を身に付けさせることが国語科の今日的課題といえる。この能力を身に付けさせるためには、論理的文章を教材として、「書く」能力を育成することも大切である。しかし一方では、豊かな文章表現力を身に付けるために、文学的文章を教材として「読み」と関連させた指導も必要となる。そこで本単元では、韻文を教材とし、表現を味わわせるとともに、豊かな文章表現力を身に付けることをねらいとした。

二　単元構成

（1）単元名　表現の豊かさ

（2）単元のねらい

本単元では俳句の特徴を理解させるとともに、俳句という凝縮された言葉から表現の豊かさを味わわせることをねらいとする。学習内容としては、俳句の基礎知識（リズム、季語、句切れ、切れ字、表現技法）、韻文（短歌、俳句）の鑑賞文の書き方、俳句の創作の仕方、俳句の推敲の仕方がある。これらの学習内容を通して、様々な表現の仕方を学ばせる。ここでは、生徒に俳句の大意のとらえ方を調べさせる授業を紹介する。

（3）単元計画　（全9時間）

①「俳句」について調べる。（1時間）

②教科書を読み、俳句の鑑賞文の書き方を調べる。（2時間）

③教科書以外の俳句や短歌を使用し、大意のとらえ方を調べる。（1時間）

④俳句の鑑賞文を書く。（2時間）

⑤俳句を作り、推敲する。（3時間）

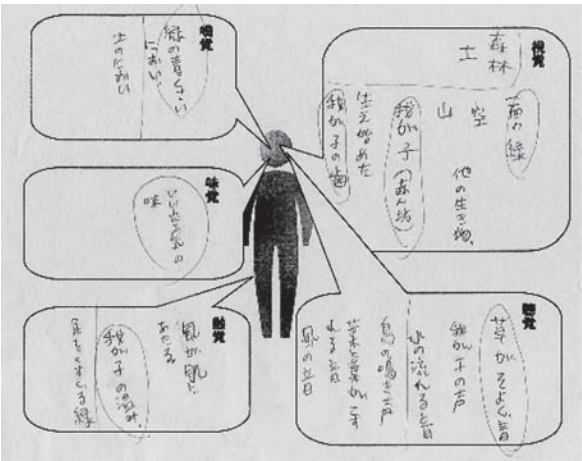
三　大意のとらえ方を身につける授業

まず、鑑賞文を書く際、大意のとらえ方が大切であることを意識させるために、「ちるさくら海あをければ海へちる」という俳句の大意を比較させた。例示した大意は、次の二文である。

・桜の花びらが散っている。海が青いので海に向かって散っている。

・潮の香に誘われて、海を見ようと高台に登った。その高台には一本の桜の木がある。桜の白い花びらが風に乗って青い海に散っていっている。海の青と花びらの白が対照的で、とてもきれいだ。花びらは海が青いので海へ向かって散っているのだろうか。

その後、俳句「万緑の中や吾子の歯生え初むる」の大意を書かせるために、まず韻文の省略された部分を補うためのブレーンストーミングをさせた。その際、作者が感じたであろう五感の感覚を想起させるための五感シートを準備した。次に、キーワードになる言葉に印を付けさせた。ここでは、ブレーンストー



資料①　U女の五感シート

ミングで出た言葉をキーワードとさせた。その際、必ず句中の言葉がキーワードになることを理解させるために、五感シートのキーワードに印を付けさせた。情景が目に浮かぶような大意を書くためには、イメージを広げる語句が必要である。そのために、五感シートに重要と思われる語に印を付けさせ、キーワードとさせた。[資料①]は、この時に使用した五感シートとキーワードである。さらに、大意を書かせ、発表させた。U女は、「昼下がり、一面の緑の中、とある親子がいました。親は我が子のはえつつある小さな歯をほほえましそうにながめていて、子どもの方は草のそよぐ音を子守歌にして足にあたる草をくすぐったがりながらも親のぬくもりに身をまかせて幸せそうにお昼寝をしていました。」という内容のものである。U女は五感シートに「一面の緑」「我が子（赤ん坊）」「我が子の歯」「草がそよぐ音」「緑の青くさいにおい」「いい空気の味」「我が子の温かみ」をキーワードとしていたのだが、キーワードを全て組み合わせたわけではない。書いている途中で、味覚である「いい空気のにおい」や嗅覚の「緑の青くさいにおい」というキーワードは使用せずに大意を書いている。授業後にこのことを尋ねたところ、味覚と嗅覚を表す語を大意に入れると、大意が書けなくなったと話していた。しかし、作者が感じたであろうことを想像し、五感シートに記入することで、イメージを広げることができたと話していた。このことから、五感シートを活用させたことで、イメージを広げることができ、大意を書きやすくさせたことがわかる。

四　本時の成果と課題

本時の授業で大意をほとんどの生徒が書くことができた。しかし、大意を書くことができないであろうと想定した生徒には、ヒントカードを準備していたが、大意を書くまでには至らなかった。ヒントカードの改良が課題として残っている。また、大意を書くことができた生徒の作品を読むと、場所や状況についての記述はできているが、色の対比について書いている生徒は一七名、作者の心情について書いている生徒は七名であった。作者の心情の記述にまで至っていないのは、大意の例文の中に作者の心情の記述がなかったことが原因と思われる。このことから、大意の例文を考えていかなければならないと感じた。

五　おわりに

韻文を教材とし、生徒に表現を味わわせるとともに、豊かな文章表現力を身に付けることをねらいとした単元としたが、まだ課題は多く残っている。今後、生徒に表現力を身に付けさせるために研鑽を重ねたいと思う。

はぎお　てつこ　春日市立春日西中学校指導教諭。「パフォーマンス評価」（雑誌「指導と評価」）、「思考力・表現力を育てる国語科学習指導」（「パフォーマンス評価」田中耕治編著）の執筆。平成二三年度文部科学大臣優秀教員表彰。

実践流交
中学国語

百人一首大会を開こう
―授業・朝学習・事前準備・大会―

東京都杉並区立泉南中学校　日髙　辰人

はじめに

百人一首は小学校でも教科書教材での音読や「色別百人一首」（百人一首を二十首程度ずつ色別にしたもの）でのかるた会などを通じて親しんでいる。

本校では一年生で五十首（1～50）、二年生で残りの五十首を覚えて学年ごとに百人一首大会を行っている。

本稿では国語の授業、朝学習、冬休みの宿題、学活等での取り組みを紹介する。

※基本的には冬休み前に授業で百人一首に対する導入を行い、冬休みに宿題として覚えさせ、大会前の一週間の朝学習時間に定着させている。冬休みの宿題には「一　授業での実践」の①～③を学年の実態に合わせて取り入れているので、全てを行っているわけではないことを付記する。

一　授業での実践

一年生の授業では百人一首の成立について簡単に教え、前半の五十首の中から何首か選び解説する。

生活班で順番に読み手になり、練習を行う。互いに読むことにより、歴史的仮名遣いに慣れるようにさせる。

①　五十首をカードにする。

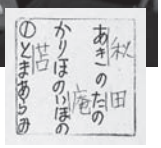
B４版の画用紙に枠をとり、表面に上の句、裏面に下の句を書かせる。余裕のある生徒には、歌人名・歌集名（古今集・新古今集・それ以外）を工夫して記入させる。（『中学生の国語 学びを広げる』一年の巻末折り込みを使用。）

※授業で記入の仕方を説明し、冬休みの宿題とした。

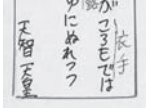
※［資料１］…（作成したカード例）

※［写真１］…休み明けの授業で三人グループを作らせ、読み手のカードを散らし、対戦しているところ。五十首なので、一試合十分程度で行える。

写真１　対戦風景



資料1　表



資料1　裏

②　大判読み札を作る。

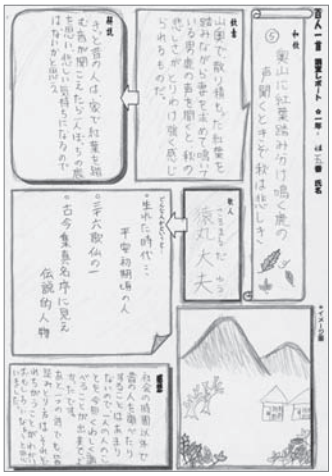
生徒一人一人に、くじ引きで百人一首の読み札を作成させ、廊下等に掲示し興味関心を持たせる。歌は書写の時間に筆ペンで書かせてもよい。

③　百人一首　調査レポートの作成。

生徒にくじ引きで「私の一首」を決めさせ国語便覧や百科事典、学校図書館や公立図書館などで調べ、まとめさせた。用紙はＡ４版

のケント紙とし、提出後に廊下等に掲示した。

調べる項目等は、①歌意・②解説・③歌人・④イメージ画・⑤調べての感想である。また、裏面は交流カードとし、家族のコメントや友人のコメントを書けるようにした。［資料2］

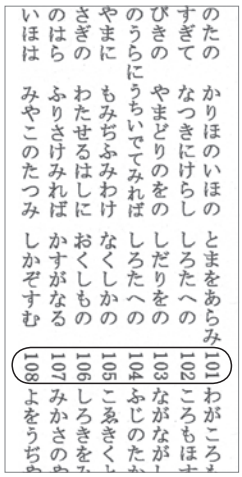


資料2　調査レポート

二　朝学習での取り組み

百人一首大会直前の五日間は、毎朝十首ずつ朝学習時に百人一首を出題した。出題方法は、予告型とランダム型の二種類を生徒の実態に合わせて実施した。予告型は前日にどの十首を出題するかを予告し、上の句に続けて下の句を記入する方法である。ランダム型はランダムに上の句を十首出題し、下の句を書かせるという方法である。また、生徒の実態によっては上の句と下の句を記号で答えさせることも行った。

朝学習や大会前の取り札の確認を行うためにエクセルに百人一首を平仮名で入力しておくと便利である。その際、上の句には1～100、下の句には101～200を振っておくと、様々な形に加工できる。［資料3］



のたの	かりほのいほの	とまをあらみ 101 わがころも
すぎて	なつきにけらし	しろたへの 102 ころもほす
びきの	やまどりのをの	しだりをの 103 ながながし
のうらにうちいでてみれば		しろたへの 104 ふじのたか
やまに	もみぢふみわけ	なくしかの 105 こゑきくとき
さぎの	わたせるはしに	おくしもの 106 しろきを
のはら	ふりさけみれば	かすがなる 107 みかさの
いほは	みやこのたつみ	しかぞすむ 108 よをうぢ

資料3　番号の付け方

三　百人一首大会を開く―事前準備―

1　対戦グループをくじ引きで選び、発表する。

・学年五～六学級であれば、一グループに全クラスの生徒が入るようにし、二～三学級であれば、一グループに二名ずつ入るようにする。その際、同じクラスの生徒が隣同士にならないように配慮する。

2　取り札の確認を行う。

・大会前に国語係等と下の句をアイウエオ順に並べた下の句索引を使って、全ての取り札が揃っているか確認する。ない札があれば、板目紙等で札を作り補充する。

3　賞状を作る。

・クラス、個人の二種類を用意しておく。

4　グループ毎の集計表を作成しておく。

・個人やクラス合計がわかるように作成する。

◆大会を行う◆

1　教員の係分担をする。

・読み手は全員とし、一人十首は読んでもらう。

・集計係（個人・クラス合計をする。）

・音響係（六段の調べなど流す。）

2　表彰を行う。

・個人賞は取得枚数で上位から表彰するが、クラス表彰は合計枚数を参加人数で割り、取得率で競うのが公平である。

写真2　スキー移動教室先での大会風景

おわりに

百人一首大会を開くという目標に向けて様々な取り組みを行った。生徒の和歌への興味関心はのび、歴史的仮名遣いへの抵抗感も減じた。これからも様々な取り組みを行っていきたい。

ひだか　たつひと　杉並区立泉南中学校主幹教諭。『伝統的な言語文化の学習指導事例集1～4』（明治図書）の「4. 詩歌・唱歌・芸能を中心とした学習指導事例集」を編集。

見つけた！こんな文学教材

京都教育大学　寺田　守

●第２回●

「夏を見上げて。」（あさのあつこ）を小集団で読む

解釈をめぐる対話の意義について述べたい。取り上げる作品は「夏を見上げて。」である（『中学生の国語　学びを広げる』二年掲載）。頭がよくて、性格もよくて、スポーツが得意な六年生の藤城一は、雷が苦手である。ある日の六時間目に夕立と共に雷が鳴り出すが、一はイメージが台無しになってしまうことを恐れて、必死に平気なふりをする。友人の恵介は、背中を丸め、小刻みに揺らして震えていた。同級生にからかわれた恵介は、「怖いから、どうしても震えちゃうんだ、それってしょうがないだろ。」とさらりと言う。そんな恵介をうらやましく思う一と恵介との思春期にさしかかった少年の心の触れ合いを描いた掌編である。

「夏を見上げて。」の解釈を話し合った記録を紹介する。平成二三年七月二五日に京都教育大学の大学院生と筆者の六名が参加した。それぞれが一文を選び話し合ったもので、以下の記録は「一なりに、がんばってもきた。」という一文について話し合った場面である。

01 A　一は努力してここまでたどり着いたのかなって思ってたんですけど、「一なりに、がんばってもきた」っていうのは、うまくいってない人の言い方じゃないかなってすごい思って。不思議な表現ですよね。

02 B　そうですね。

03 A　「なんとかなりに」っていつ使いますか？

04 B　自分の物差しでみたいなことですね。自分なりじゃなくっても、がんばってるって思われてるんですよね。そこをあえて自分なりに。

05 D　自分なりじゃなくてもがんばってるって思われてて、その状況が生まれた後、それを守るというか、自分のイメージを壊さないように、やってきたんだっていう「もきた」。

06 B　あー。

Aは、01でこの一文が「うまくいってない人の言い方」なのに、実際の一は勉強もスポーツも一番でうまくいっており、つじつまが合わないと疑問を述べた。Aは、この一文を、がんばったけれどもうまくいかなかった時の言い訳のようだ、と考えたのである。Dは05で、「自分のイメージを壊さないように、やってきた」とがんばる内容の違いだと述べた。つまり、周囲は一が勉強やスポーツの努力をしていると考え、一自身はそうしたイメージを壊さないように振る舞う努力をした、と理解した。これにBが「あー」と納得を示す声を上げた。小集団で一文の意味を話し合う意義の一つがここにある。一人ではたどり着けなかった解釈に仲間の発言を聞くことで到達する。人は思ってもみなかった考えを聞き、しかも納得できる時、思わず「あー」と声を漏らす。そうした「あー」体験が、理解を推し進め読む楽しさを感じさせる。

07 F　『バッテリー』の主人公もそうなんですけど、できる男なんですよね、一も。

08 C　うんうん。確かに。

09 F　成績も良いし、運動もできる。で、それはがむしゃらにがんばって、すごい努力をして築き上げたものっていうよりは、ちょっとクールにサラリとできてしまうような、ちょっと嫌なやつなんですよね。いや、でも性格は、全然嫌じゃないという、もう、非の打ち所のない嫌なやつなんですが。

10 C　ふふ。

11 A　バッテリーの主人公は、でも、なんかちょっとツンツンしてるというか。

12 F　嫌なやつでしたね。

13 A　うん、はい。でもこの子は、けっこう良い子じゃないですか、最後まで。

14 F　がんばってるところを、あんまり人に見せたくないっていう時の謙遜。あるいは自分で、がむしゃらにがんばってることを認めたくなくて、まぁそれなりにがんばってるんだけどねっていう。

15 B　採用試験むちゃくちゃできました。自分なりにですけど、みたいな。謙遜ですよね。この一文があることで、がむしゃらじゃないヒーロー像ができますよね。

ここでは『バッテリー』の主人公原田巧と比較した一（はじめ）の人物像が話題に上る。Fは一（はじめ）がイメージを壊さない努力でなく、やはり勉強やスポーツをがんばっていると考えた。そして類似する『バッテリー』の主人公を持ち出した。

16 B　これ、一（はじめ）なりに「も」がんばってきた、とは違うんですよね。

17 A　そうですね。一（はじめ）なりにがんばって「も」きた。何？「も」って。

18 F　「がんばってもきた。」

19 A　あ、だから、分かった。天性じゃなくて努力もしたってことか。

20 E　そうそう、がんばってない才能もあるってこと。

21 B　でもなんか、100パーセントがんばってないじゃないですか、この言い方って。

22 F　もともとスポーツも勉強もできるし、性格も良いけど。

23 複数　努力もした。

24 B　がんばってきたけども、その他大勢の人たちのがんばりの尺度とは違うよっていう。

25 A　うんうんうん。あはは。確かに。

26 E　リアルやな。

27 C　何もしてなかったわけじゃないよ、みたいな。自分なりのがんばりもしてきたよ。

BとAが16、17で「も」の働きに注目した。そして19や20、22の発言から、「も」の添加の意味を共通の理解とした。才能もあるけれど努力もしているという一（はじめ）の自己認識を読み取った。解釈をめぐる話し合いでは、異なる解釈が提出されることで、対話が促される。対話とは、ただ参加者が自分の意見を述べ合うことではなく、自分と相手との考えの違いに気づき、質問し、その上で合意を形成していく過程である。解釈法を用いて言葉の意味を吟味する話し合いは、「あー」といった納得を生み、合意を形成することができる。

参考文献

寺田守、『読むという行為を推進する力』、溪水社、二〇一二年

てらだ　まもる　京都教育大学准教授。専門は読むことの学習指導研究（文学）。現在は小グループの読書を活用した学習活動の開発に取り組んでいる。

サブカルチャーと国語の授業

第2回

早稲田大学
町田　守弘

まちだ　もりひろ
大学の「国語科教育法」を担当して，授業で実際に活用できる教科書の必要性を実感したことから，編著『実践国語科教育法』（仮称）を刊行するための具体的な準備を進めています。

テレビゲームを活用した創作の導入

サブカルチャーを国語の授業に取り入れる主な目的は，学習者の興味･関心の喚起という点にある。今回は，多くの学習者が好むテレビゲームを活用して，小説教材の読みの学びに創作を導入した授業の可能性について考えてみたい。前回確認したように，それはテレビゲーム自体を教室に持ち込むことを意味するものではない。発想の出発点は，何故テレビゲームが子どもたちを惹きつけるのかという素朴な問いである。

「ドラゴンクエスト」で知られるゲームデザイナーの堀井雄二は，かつて「テレビゲームの面白さとは」というエッセイ（『青春と読書』1993.6）の中で，インタラクティブ性（双方向性）こそがテレビゲームの原点であると指摘した。これに加えて，問題を解決して課題をクリアしたときの達成感もまた，テレビゲームの面白さを支えている。これらの要素を国語科の言語活動に取り入れることを工夫してみたい。

小説教材を読むという活動は一方向的なものだが，これをあえて双方向的な活動にするとしたらどのような展開になるのだろうか。そこで，「サウンドノベル」というジャンルのテレビゲームの仕掛けを参考にする。サウンドノベルとは，本のページをめくるようにして，ディスプレイ上の映像情報とともに現れる文字情報を読み進めるものだが，物語が進行すると「分岐」と称される箇所が出現する。分岐には複数の選択肢が登場し，プレイヤーはその中の好きな選択肢を選ぶ。すると，それぞれの選択肢に続く異なる物語が進行することになる。どれを選ぶかという点に，ゲームとしての要素がある。

授業で小説を読んだ後で四人のグループを編成し，分岐となる箇所を定めてメンバー各自が二つの選択肢とそれに続く短い物語を創作する。相互に交換して友人が作成した選択肢から好きなものを選んで，その選択肢に続く物語を読む。それに続けて新たな選択肢を二つ設定し，さらに物語を創作する。創作に際しては，原作の設定を変えずに，無理のないプロットにするというルールを設ける。これを繰り返して四人のグループ内で一巡すると，四つの新たな物語が完成する。それらをグループで評価し，最も面白かった作品を朗読劇にして発表する。

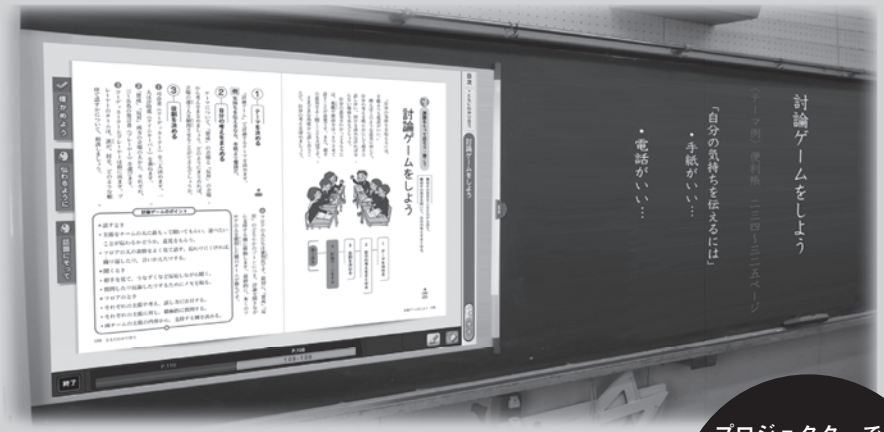
わたくしは中学1年生を対象として，この方法で別役実の「空中ブランコ乗りのキキ」を扱ったことがある。小説を読むという活動を，テレビゲームを活用した創作を取り入れることによって，より深めることができた。授業では最終的に，グループで創作したストーリーをもとにまとめた個々の学習者のオリジナル版「空中ブランコ乗りのキキ」を作成することにした。

このように，テレビゲームの特色を活用することによって学習者の興味・関心を喚起し，理解力・表現力の育成を目指すことができる。

『中学生の国語』

指導用デジタルテキスト 1年～3年

大きな教科書で
言葉の力をさらに育てる



プロジェクターでスクリーンに映したり，電子黒板や大型ディスプレイを使用したりして，普通教室で活用できます。

●教科書をそのまま再現できます！
●先生方の「使いやすさ」を追求しました！
●デジタルテキストならではの豊富な資料を追加しています。

学校フリーライセンス
各学年 価格（76,000円＋税）

編集後記

新年度を迎え、新しい教室に新しい友だち、そして新しい教科書と、たくさんのスタートに彩られる春を迎えました。今回は「授業びらきのアイデア」という特集を組みましたが、これには先生の数、教室の数だけアイデアがあることと思います。本号でご紹介した以外にもおもしろいアイデアがありましたら、どうぞ編集部へお寄せください。

ところで、「みんなに、ひとつずつのお月さま」とは、巻頭エッセイにて長野ヒデ子先生がご紹介くださった、お子様のかわいらしい一言です。大人はいつの間に大人になってしまうのか、子どもの発想は本当に自由で、思いやりに溢れているなぁと感じます。みんなに〝ひとつずつ〟のお月さまが、それぞれの道を照らして、ときに見守り、ときに勇気づけているのかもしれないな、そう思えるほど春の月はきれいに大きく見えました。（S）

三省堂 国語教育 ことばの学び 第26号

二〇一二年五月一五日発行
定価 一〇〇円（本体九六円）
編集・発行人 北口 克彦

〔発行所〕株式会社 三省堂
〒一〇一-八三七一
東京都千代田区三崎町二-二二-一四
TEL ○三(三二三〇)九四二七〔編集〕
振替 東京 ○○一六○-五-五四三○○
〔印刷所〕泰成印刷株式会社
東京都墨田区両国三-一-一二

『中学生の国語』指導用教材

話すこと・聞くことDVD ①～③

各巻とも解説書付き　価格（18,000 円+税）

①スピーチ・討論ゲーム
②プレゼンテーション・パネルディスカッション
③パブリックスピーチ・企画会議

- 「話すこと・聞くこと」領域の教材に対応した，視聴覚素材を収録した DVD です。
- 各巻の解説書には，映像のスクリプトと内容解説，授業で扱う際の留意点の解説を掲載しています。
- 生徒による実際の活動映像を用いて，活動のポイントをわかりやすく解説しています。

話すこと・聞くことCD ①～④

各巻とも CD1 枚・解説書付き　価格（3,000 円+税）

①聞くことのレッスン 1
②聞くことのレッスン 2
③聞くことのレッスン 3
④聞き取りテスト問題例集

- 「話すこと・聞くこと」領域の教材に対応した，視聴覚素材を収録した CD です。
- ④には聞き取りテスト用の問題例を収録しています。
- 各巻の解説書には，音声素材のスクリプトと内容解説，授業で扱う際の留意点のほか，「聞くこと」について考える論考や学習課題例を掲載しています。

詳しくはwebサイトをご覧ください ➡ http://www.sanseido.co.jp/

回覧											